

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 附属中学校・教諭

氏 名 仙田 健一

研究期間 令和3年度

研究プロジェクトの名称	中学校社会科における上越地方の地域素材の教材化に関する実践的研究 ～当事者意識と情報活用能力の育成に着目して～
研究プロジェクトの概要	<p>本学では「21世紀を生き抜くための能力」に関する研究を推進している。これを踏まえて、令和2年度上越教育大学研究プロジェクト「社会科教育における「21世紀を生き抜くための能力」に関する実践研究」（代表：仙田健一）では、郷土愛と情報活用能力を特に育成すべき資質・能力と位置付け、実践研究を行った。その研究において、郷土愛を育成する上で、地域素材を教材とし、その課題に対して、当事者意識をもたせることが必要であることを明らかにした。一方、地域素材を教材とし、当事者意識を育成することと情報活用能力がどのように関連しているのかを明らかにすることができなかった。</p> <p>そこで本研究では、中学校社会科における上越地方の地域素材を教材化し、授業実践を行う。その中で当事者意識と情報活用能力の育成がどのように結び付いているかを実践研究によって明らかにすることを本研究の目的とする。</p>
<b>研究成果の概要</b>  ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	<p><b>1 新学習指導要領及び、その先の教育を見据えた理論との関連</b></p> <p>当事者とは「物事に直接、関わりのある人<sup>1)</sup>」のことである。当事者意識もしくは当事者性とは「ある課題に対して自分が考えるべきことである、もしくは行動すべきことである」という意識のことである。これは文部科学省が示す「主体的に学習に取り組む態度」と重なる部分が多い。「主体的に学習に取り組む態度」には粘り強く学習に取り組もうとする側面と自ら学習を調整しようとする側面がある。北尾倫彦は主体性を支える意欲として、「課題に深く関与しようとして学ぼうとする」、「自分を生かすために学ぼうとする」ことを示している<sup>2)</sup>。これらのことから学習者に「当事者意識」があれば粘り強く学習に取り組んだり、自らの学びを調整したりすることができると考えられる。しかし、「当事者意識」がなければ主体的に学習に取り組むことができないわけではない。このことから「主体的に学習に取り組む態度」を育成する上で「当事者意識」は十分条件であって、絶対条件ではない。</p> <p>一方、「平和で民主的な国家及び社会の形成者<sup>3)</sup>」の育成を目指す社会科教育において、「当事者意識」は絶対条件である。藤瀬泰司は「社会問題を学習するということは、当事者として社会の形成のプロセスを辿ることによって、既知社会のあり方を反省し、新たな社会の可能性を考える<sup>4)</sup>」こととした。つまり、社会の形成者を育成する社会科教育において、平和で民主的な国家及び社会における当事者を育成する必要性を示しているのである。これについて、岡田泰孝は「地域社会の問題について実際に決定や提案できる場合ならば、子ども自身が直接的な「当事者」になることができる<sup>5)</sup>」としている。また、唐木清志は「追究すべき課題が教科書の中にあるのではなく、現実社会の中にこそあるという認識は、地域社会の生々しい課題と実際に格闘する中でこそ生まれてくるものであろう<sup>6)</sup>」と述べている。しかし、身近な地域の社会的事象に対して「当事者意識」をもっているかといえば必ずしもそのようなわけではない<sup>7)</sup>。授業者が授業の中で手立てを講じることで育成されるものである。</p>

これらのことから社会科教育において、地域社会の課題を考える上では、特に「当事者意識」の育成を想定すべきである。

## 2 社会科教育における当事者意識と情報活用能力の関係性

地域社会の課題を解決すべき当事者であるならば、情報活用能力を生かして課題解決に当たる必要がある。それは当事者の既知の情報だけで現実社会の価値多面的な課題を解決することはできないからである。現実社会においても、インターネットを含む情報の活用を通して地域を活性化する活動は世界や日本の都市や市町村において行われている。文献調査したり、身近な人や専門家と意見交換したり、それを基に資料を作成し、プレゼンテーションで提案することで少しずつ課題解決に迫っていくのである。このような活動を通して、「当事者意識」を高めているともいえる。恩田守雄は「IT革命という文明の利器を、地域づくりに活かす<sup>8</sup>」ことの重要性を示している。これらのことから地域社会の課題を解決する上で当事者の情報活用能力は必要不可欠なものであるといえる。

そこで本研究では生徒がどのように情報を活用し、課題解決に迫り、当事者意識をもったのかを示すこととしたい。

## 3 上越地方の地域素材の教材化と学びの実際

実践の詳細については各報告書、本校紀要、実践事例集、学会発表等で示しているため、本稿では実践の概要を示している。

### 1) 宇宙×農業で上越の未来を救おう～JAXAの英知を身近な地域に還元することを通して～

単元の目標：地球観測衛星の情報を活用することを通して、中部地方の気候や産業について多面的・多角的に考察し、上越地方の農業の未来を予測し、その未来の在り方に対して提言する。

学びの実際：「地理的分野 日本 の諸地域」の中で中部地方の産業を学習内容とした。地域素材として、上越地方の農業を扱った。その特色や課題を捉え、上越地方の農業の未来を考え、農業関係者に提案を行った。情報活用の場面として、宇宙航空研究開発機構 JAXA との授業連携を行い、JAXA 職員からの講話や宇宙観測衛星データである Google Earth Engine を活用する活動を位置付けた。

学びの成果：本実践において、生徒はどのように変容したのだろうか。アンケートの「宇宙と自分自身の生活は関わっているか」について、単元の始まりでは、農業との関わりを認識していた生徒が6%（2人、実施日2021年4月19日）だったのに対して、宇宙開発が農業に大きな影響を与えていることを知り、同じアンケートで100%（36人、2021年7月5日）となった。

表1 宇宙開発と自分自身の生活は関わっているか n=36

深く関わっている	関わっている	あまり関わっていない	関わっていない
前 36% (13)	28% (10)	33% (12)	3% (1)
後 67% (24)	33% (12)	0% (0)	0% (0)

表中の数値は左側がパーセント、( )が人数

表2 宇宙開発と農業の関わりについて知っているか n=36

よく知っている	知っている	あまり知らない	全く知らない
前 3% (1)	3% (1)	61% (22)	33% (12)
後 28% (10)	72% (26)	0% (0)	0% (0)

表中の数値は左側がパーセント、( )が人数

レポートのまとめには以下のような記述が見られた（内容の一部抜粋）。

- ・農業だけでなく様々な会社や企業などと宇宙を結び、日本の産業をより発展できる未来を創っていきたい
- ・色んな人に愛される農業にするために私は情報を発信する側として協力できる。例えば、今回の学んだデータの活用の仕方を発信したり、自分自身がさらに農業について知ったりすることが今の自分にできることだ

- ・これからは農業をとことん体験してみると面白いと思った。(中略) まずは、自分たちが体験し、それを周りに広げていきたい
- ・農業に関わる人だけではなく、自分自身も農業に興味や関心を持ち、考え続けることが今の自分に必要とされていることだ
- ・今回の課題を通して、日本の農業だけでなく、漁業、工業の新しい技術を創ったり、支えたりできる人に将来なりたいと思った

## 2) 翁飴から上越の文化について再考しよう～高橋孫左衛門商店の秘密を探ることを通して～

単元の目標：江戸時代と明治時代の文化を比較しながら、上越地方にも独自の生活文化が生まれたことを理解し、継承されてきた文化を多面的・多角的に考察することで、上越地方の文化の価値を尊重し、主体的に追究しようとする。

学びの実際：「歴史的分野 近世の日本」の中で江戸時代の産業の発達と町人文化を学習内容とした。地域素材として、寛永元年(1624年)に創業した高橋孫左衛門商店やバテンレースを扱った。高橋孫左衛門商店やバテンレースを通して、江戸から明治時代の高田の町の様子を考察した。情報活用の場面として、プレゼンテーションソフトを活用し、江戸時代と明治時代の高田の町のどちらが暮らしやすいのかをまとめ、討論する活動を位置付けた。

学びの成果：本実践において、生徒はどのように変容したのだろうか。アンケートの「上越地方の文化に魅力を感じるか」について、単元の始まりでは、「魅力をととても感じる」と答えた生徒が9% (3人、実施日 2021年9月3日) だったのに対して、学習を通して上越地方の文化の魅力を認識し、同じアンケートで53% (19人、2021年10月4日) となった。

表3 上越地方の文化に魅力を感じるか n=36

	とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
実践前	9% (3)	72% (26)	19% (7)	0% (0)
実践後	52% (19)	45% (16)	3% (1)	0% (0)

振り返りには以下のような記述が見られた (内容の一部抜粋)。

- ・今回、高田の歴史や文化を考えてみると、高田だからこそ発展した技術などがある。江戸時代のことを調べていく中で、今までは考えられなかった高田の良いところを見付けることができた。高田だけでなく、江戸時代の暮らしや文化など時代背景も考えることができた。様々な身分になって考えてみると一つのことでも違うように捉えられることが分かった。視点が違うからこそ、様々な高田の文化が作り上げられてきたのだ。江戸時代にも明治時代にも、メリットとデメリットがあって、どちらの視点も大切にしていかななくてはいけない。高田の文化を消してしまわないよう、自分にどんなことができるのかを考えていきたい。
- ・今回の学習で様々な場所に体験や見学へ行った。江戸時代、明治時代から受け継がれている物は先代が頑張って残した物だと思うし、今の人がしっかりと受け継いでいこうとしているからこそ体験や見学ができるのだ。この長い歴史を途絶えさせないでいることが本当にすごいなと思った。これからの時代は今までの物を受け継いでいくために、もっと多くの人に知ってもらい発散することが大事だ。高田のバテンレースなど今は少ない人数で受け継いでいる。もっとたくさんの人に知ってもらいたい。これから私たちが高田の歴史を途絶えさせずに後世に繋げていきたい。

## 3) 明治時代の上越は、どこに鉄道を引くべきか～室孝次郎の信越線敷設から考える～

単元の目標：信越線敷設の時期、背景、影響に着目し、国民生活の変化を理解し、近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、身近な地域の歴史について、主体的に追究しようとする。

学びの実際：本単元は「歴史的分野 近代の日本と世界」の中で明治時代の国民生活の変化を学習内容とした。地域素材として、身近な地域の鉄道敷設に尽力した室孝次郎を扱った。情報活用の場面として、明治時代の上越のどこに鉄道を引くのかを Google Earth で確認しながら白地図に記入した。そして、鉄道の開通の影響

があった場所を予想し、上越地方にどのような影響を与えたのかについて考察した。また、身近な地域の歴史を深く知るために直江津Dレールパークや歴史博物館への調査活動を位置付けた。

学びの成果：明治時代の信越線の敷設に関わる社会の様子の取り上げる学習により、身近な地域の歴史について主体的に追究しようとする態度を育成した。以下、抽出クラスの授業アンケート（表4・5）である。

表4 授業実施前のアンケート 2021年11月22日, n=36人

上越地方の歴史や文化に関する課題は「自分自身が解決すべき問題である」といえるか

とてもそう思う 14% (5人)	そう思う 67% (24人)	あまり思わない 19% (7人)	思わない 0% (0人)
---------------------	-------------------	---------------------	-----------------

表5 授業実施後のアンケート 2021年11月30日, n=36人

上越地方の歴史や文化に関する課題は「自分自身が解決すべき問題である」といえるか

とてもそう思う 30% (11人)	そう思う 67% (24人)	あまり思わない 3% (1人)	思わない 0% (0人)
----------------------	-------------------	--------------------	-----------------

#### 4) 上越地方の紅ズワイガニ漁とメタンハイドレート開発の共存を考える

単元の目標：上越地方の漁業や開発について他の海洋と比較しながら理解し、上越地方の漁業と開発について多面的・多角的に考察することで上越地方の漁業の価値を尊重し、その未来の在り方に対して提言ができ、自分自身にできることが何かを考え、行動しようとする。

学びの実際：本単元は「地域的分野 世界から見た日本の姿」の中で漁業と資源開発を学習内容とした。地域素材として、上越地方の紅ズワイガニ漁とメタンハイドレート開発を扱った。情報活用場として、プレゼンテーションソフトを活用し、レポートにまとめた。

学びの成果：生徒が2022年1月29日、第74回海洋教育フォーラム in 仙台で学習した内容を発表した。

#### 5) 雪国防災マップを作ろう～上越地方の融雪と地盤沈下のジレンマを解決するために～

単元の目標：上越地方の豪雪時の減災や関連する災害を防ぐことを考えることを通して、観察や野外調査、文献調査を行う際の視点や方法、地理的なまとめ方の基礎を理解し、調査の手法やその結果を多面的・多角的に考察し、降雪による二次被害や地盤沈下といった関連災害を防ぐために、自分自身にできることが何かを考え、行動しようとする。

学びの実際：本単元は「地理的分野 地域調査の手法」の中で自然災害の調査を学習内容とした。地域素材として、高田地域の克雪と地盤沈下対策のジレンマを扱った。情報活用場として、デジタル地図や地域調査の情報を関連付けて、ベースマップに記入する活動を位置付けた。

学びの成果：生徒が2022年3月6日、フィールドワーク in JAPAN～全国中学生生徒地域研究発表会～Zoomによる全国リモート会議で調査した内容を発表した。

#### 6) 将軍の子どもである松平忠輝が改易されたのはなぜだろう？～越後大名の変遷を取り上げた大名統制から～

単元の目標：越後の大名の変遷を通して、江戸幕府の成立と大名統制、身分制と農村の様子、鎖国などの幕府の対外政策と対外関係などを基に、幕府と藩による支配が確立したことを理解し、幕府と藩の支配について多面的・多角的に考察することで、江戸幕府の大名統制を主体的に追究しようとする。

	<p>学びの実際：本単元は「歴史的分野 近世の日本」の中で江戸幕府の成立と対外関係を学習内容とした。地域素材として、徳川家康の六男であり、高田城を築いた松平忠輝を扱った。情報活用の中として、画像共有アプリで調べたことを共有する場を設定した。</p> <p>学びの成果：単元指導案の作成，授業実践。</p> <p><b>7) SNOW MEMORIAL PEACE PROJECT (雪プロ) ～Think Okinawa, Act Joetsu～</b></p> <p>活動の目標：沖縄学習と地域での学びをコラボレーションすることで，身近な地域に平和の大切さを発信する。</p> <p>学びの実際：高田世界館「月桃の花」視聴，オンライン沖縄講話，宇喜世での食文化体験，雪上遊び，雪像作り，フィナーレ・スノーキャンドルを行った。総合的な学習の中で，これまでの直江津捕虜収容所，長野巡検，被爆者講話といった平和学習や地域学習の総括を行った。地域素材として，雪国であるからできる平和の発信としてスノーキャンドル 6000 個で附属中学校グラウンドに平和の灯火を作った。</p> <p>学びの成果：振り返りには以下のような記述が見られた（内容の一部抜粋）。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スノーキャンドルはみんなで準備してきたものだったので全てに点火した時は言葉にならないほど美しく，そこで「青葉の歌」を歌えたことはすごく幸せなことでした。人生の中でもう経験できないことができて，とても貴重な体験になりました。最後に私の考える平和とは，日常を楽しく幸せに過ごせることだと思います。特別なことをするのはなく，日常をもっと大切に過ごさなければいけないのだと感じました。また，自分と関わりのある場所で起こっている問題に当事者意識を持って考えていかなければと思います。この一週間で，人としてどうあるべきかを学ぶことができたと思います。</li> <li>・この雪プロの1週間とそれまでの期間は，私の人生にとって，大きな価値のある時間でした。上越にいる私たちにしか出来ないこと，学年全員でできたことはとても誇らしいです。上越を代表する歴史的建造物・高田世界館で沖縄の映画を観て，沖縄と上越をつないで“平和”を感じ・考え，上越の雪で，みんなが笑顔になって，最後は沢山の方々の想いをのせてキャンドルの前で青葉の歌を歌った。今思えば，すごく充実していたし，色々な感情がありました。何よりも最後のフィナーレは，今までを振り返り，世界へ歌うことができて，一週間の中で，一番心が動いた瞬間でした。青葉の歌をみんなが一人ひとりの声で歌っていて，聴いている人の心も動かす合唱だったと思います。キャンドルは，一個のキャンドルでは弱く，儂い感じのするキャンドルになるが，6,000 個という，壮大な数が集まると，力強く，人間に感動を与えます。キャンドル一つ一つが光を強く放ちます。それは，私たちと同じです。precious 学年の一人一人の個性が輝いて，集まると沢山の人々に感動を与えます。沢山の方々の心に響いたのなら，私はすごく嬉しいです。この雪プロを無事に終わったのは，沢山の方々のご協力があったからです。私たちを支えてくださったみなさんに感謝しかありません。ありがとうございました。</li> </ul> </div>
<p><b>研究成果の発表状況</b></p>	<p><b>【公開授業】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年10月11日，2021年上越教育大学附属中学校オンライン教育研究協議会，2学年 社会科 歴史的分野「上越地方の文化を再考しよう～老舗鮎屋の秘密を探ることを通して～」。</li> </ul> <p><b>【研究発表】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年10月24日～11月7日，全国社会科教育学会自由研究発表第7分科会(4)，『『人間力』の育成を目指した社会科授業—多様な文化を尊重する態度に着目して—』。</li> <li>・2021年11月28日，日本社会科教育学会自由研究発表第4分科会(5)，「地域社会への参画を考える生徒を育成する社会科授業—宇宙から見た上越地方の農業の可能性を追究する活動を通して—」。</li> <li>・2022年1月29日，第74回海洋教育フォーラム in 仙台 私たちの海～身近な海から世界の大洋を望む～，公益社団法人日本船舶海洋工学会，海洋教育推進委員</li> </ul>

	<p>会主催，生徒発表「上越地方の紅ズワイガニ漁とメタンハイドレート開発の共存を考える」。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年3月6日，フィールドワーク in JAPAN～全国中学生生徒地域研究発表会～Zoomによる全国リモート会議，生徒発表「雪国防災マップを作ろう～上越地方の融雪と地盤沈下のジレンマを解決するために～」。</li> </ul> <p><b>【メディア・報道関連】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年6月3日，「上越タイムス」，p. 1， 1）の実践1時間目紹介。</li> <li>・2021年7月3日，「上越タイムス」，p. 6， 1）の実践10時間目紹介。</li> <li>・2021年7月3日，NST報道， 1）の実践紹介。</li> <li>・2021年9月10日，「上越よみうり」，p. 2， 2）の実践2時間目紹介。</li> <li>・2021年9月25日，「上越タイムス」，p. 11， 2）の実践4時間目紹介。</li> <li>・2021年12月1日，「上越タイムス」，p. 10， 3）の実践紹介。</li> <li>・2022年3月13日，「上越タイムス」，p. 20， 7）の実践紹介。</li> <li>・2022年3月14日，「教育新聞」オンライン， 7）の実践紹介。</li> <li>・2022年3月15日，NHK新潟610報道， 7）の実践紹介。</li> <li>・2022年3月16日，「新潟日報」，p. 19， 7）の実践紹介。</li> </ul> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「JUEEN2021AUTUMN」，p. 10， 1）の実践紹介。</li> <li>・JAXA宇宙教育センターHP，宇宙を活用した教育実践事例，「<a href="https://edu.jaxa.jp/activities/example/archive/">https://edu.jaxa.jp/activities/example/archive/</a>」， 1）の実践紹介。</li> <li>・2022年，東書教育賞入選「身近な地域の農業の未来に願いをもつ生徒を育成する社会科授業－宇宙から見た上越地方の農業の可能性を追究する活動を通して－」。</li> <li>・2021年8月3日，坂井輪中学校，ロイロノート研修講師。</li> <li>・『上越教育大学研究紀要』，2021年，pp. 32-41， 1）の実践事例。</li> <li>・『上越教育大学実践事例集』，2021年， pp. 10-18， 2）の実践事例。</li> <li>・令和3年度モビリティマネジメント教育（交通環境学習）にかかわる学校支援制度実施結果報告書， 3）の実践に関する報告。</li> <li>・年間指導計画作成。</li> </ul>
<p><b>学校現場や授業への研究成果の還元について</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「東京書籍 社会科リーフレット（仮）」中学校向け機関紙，2022年4月発行予定， 1）の実践紹介。</li> <li>・経済産業省，STEAM教育実践事例紹介， 2）の実践紹介。</li> <li>・長瀬拓也編『教師になるには』，株式会社キーステージ21，2022年6月発行予定，分担執筆。</li> <li>・日本社会科教育学会，全国社会科教育学会での発表。</li> <li>・各学会論文等への投稿。</li> </ul>

<sup>1</sup> 『大辞泉』小学館，2012年。

<sup>2</sup> 北尾倫彦『「深い学び」の科学』図書文化社，2020年。

<sup>3</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』東洋館，2018年。

<sup>4</sup> 藤瀬泰司「社会形成の論理に基づく社会科経済学習の授業開発：単元『君は会社でどう働くか～特許権問題から見える会社のあり方～』』『社会科研究』61号，2004年，pp. 61-70。

<sup>5</sup> 岡田泰孝『政治的リテラシー育成に関する実践的研究 小学校社会科における内容・方法・評価のあり方』東洋館，2021年，pp. 57-58，岡田は「子どもたちは論争問題の直接的な『当事者』にならなくても『問題的事象と学習者との距離感』や『心理的・物理的な関係』が近くなり，深まれば『当事者性』をもって，その問題について，判断し決定できる」としている。

- 
- <sup>6</sup> 唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育 日本型サービス・ラーニングの構想』東洋館, 2008年, p. I, 唐木は「自らが社会の担い手であるという自覚は, 社会参加を通して, 多様な人々と交流する中でこそ芽生えてくる」としている。
- <sup>7</sup> 仙田健一「地域の課題に当事者として向き合う生徒を育成する社会科授業—学校統合を考える討論を通して—」『教育実践論文』第28集, 2018年, pp. 37-42。
- <sup>8</sup> 恩田守雄『グローバル時代の地域づくり』学文社, 2002年, p. 159。